私家版

日本語文法

井上ひさし

新潮社

私家版

日本語文法

井上ひさし

新潮社

私家版日本語文法

昭和五十六年三月二十五日　発行
昭和五十六年八月　二十　日　十五刷

著者　井上ひさし

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務〇三（二六六）五一一一
編集〇三（二六六）五四一一　振替東京四―八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　大口製本株式会社

定価九二〇円

© Hisashi Inoue 1981 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

枕ことば　7
擬声語　13
格助詞「が」の出世　19
ガとハの戦い　26
時制と体制　34
受身上手はいつからなのか　40
形容詞の味　47
自分定めと縄張りづくり　54
ナカマとヨソモノ　61
論より情け　68
尻尾のはなし　75
漢字のなくなる日　81

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

漢字は疲れているか　88
漢字とローマ字　94
振仮名損得勘定（ルビはそんかとくかをかんがえる）　101
句点（マル）と読点（テン）　108
句読点なんか知らないよ　115
区切り符号への不義理　122
……台の考察　129
晴れたりくもったり所により雨　136
一筆啓上、敬語はまだまだ元気でござる　144
恩の売り買い　151
敬語量一定の法則　158
n音の問題　165

素人の　古典まなびの　七五調　172
2n＋1　179
ふたつの仮名づかい（ひ）　186
正書法序論　193
日本語は七通りの虹の色　199
ウソについての長いまえがき　207
話半分、嘘半分　214
外来語について　220
「のだ文」なのだ　228
コンピュータがねをあげた　235

私家版

日本語文法

枕ことば

だれかに、中学と高校での国文法の授業についてなにか短い感想を求められたら〈困惑した、退屈した、そして恐しかった〉と答えれば、なにやらぴたりと嵌まる。

まず困惑は、最初の時間に教師が「正しく日本語を書き、きれいな標準語を話すためにも、みなさんは文法というものをしっかりと身につけなければなりません」と語ったときにはじまった。となると母親から口移しにおそわった自分たちの言葉はどうなるのだろう。母親の言葉はまちがいで、その上、汚いのか。教師たちは声をそろえて父母に孝養をつくすようにと教えてくれたが、それとこれとをどう折り合いをつければいいのか。母親に孝行を心掛ければ母親の言葉を汚いときめつける日本語文法は右から左へと聞き逃した方がいいのか、あるいは不孝は覚悟の上で文法を学ぶか。態度を決めかねているうちに高校に進んだが、あるとき教師が「わたしの立場としては形容動詞なるものを認めることはできない。しかし教科書はこれに一章をあてているのでひと通り説明しておこう。さて、いわゆる形容動詞とは……」とはじめたから、なんだばかばかしいとおもった。母親の言葉を〈方言〉と呼び、汚物扱いしていた国語が、そしてそれを支えている文法がそんなにあやふやなものだったのか。それならこっちから願いさげだ。以後はもっぱら居眠りをしてすごした。いま思えばその教師は熱心な文法家で、

たとえば山田（孝雄）文法のエッセンスを「動詞は事物の性質や状態が運動したり発展したりするところを捉えて表わす用言で、形容詞は事物の性質や状態が静止し、変化しないあり方を表わす用言である」などと口当りよく砕いて与えてくれたが、こちらは「だからどうした」「へえ、それで」と低声のにくまれ口、もっとも大学入試が近づくにつれ様子が変り〈あしびきの山鳥の尾のしだり尾の〉は次の〈長長し〉を引き出すための序で、〈あしびきの〉は〈山〉の枕詞、〈山鳥の〉の〈の〉は連体修飾格の格助詞……と丸暗記をはじめた。理解できないことを暗誦するのだからこれは苦行で、加えて音韻体系は別として自分が日ごろ常用する南奥方言とほとんど同じ言葉に関する文法が英文法よりもはるかに難しいことに気づいて、自分はほんとうに日本人なのだろうかと不安になった。

怠け者の自己弁護、さもなくばズーズー弁圏出身者のひがみ、どちらととってくださってもよろしいが、文法授業の初期に、いわゆる日本語とわたしたちの常用語との境目あたりについて、一時間でいいからなにか説明があればもっと日本語文法に興味が持てただろうとおもう。たとえば南奥方言の形容詞〈赤い〉は、

あげべ［agɛ:-be］
あげがった［agɛ:-gaqta］
あげえぐ［agɛ:-gu］
あげ［agɛ:］
あげ［agɛ:］
あげえば［agɛ:-ba］

と活用するが、それぞれの活用形がすべて終止の形［agɛ:］を含んでいる、これは形容詞

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

がひとつの形にまとまって行く傾きがあることをあらわしており、つまりわれわれの常用語では形容詞は無活用化に向って進んでいるわけだ。それにひきかえいわゆる日本語では……といった塩梅におそわっていたらすこしは事情が変っていたかもしれない。すくなくともそう困惑せずにすんだだろう。そんなわけで入学試験が終るやいなや文法書を紐でくくって古本屋へ持って行ったのだが、ちかごろは逆に古本の文法書を買いあさって歩いている。理由はいくつかあるけれども、ひとつは柳田國男（一八七五―一九六二）のいう〈形容詞飢饉〉のせいである。この百年間に西欧文明が洪水のように日本へ流れ込んできた。誤解をおそれずに粗っぽくいえば文明とは名詞の一大集団のことであるから、たちまちこの島国は横文字を漢語に移しかえた名詞で溢れてしまった。その証拠にどんな国語辞典でもいい、任意の一頁をごらんください。半分近くが名詞で占められているはずだから。ところがその名詞の数に見合うだけの動詞や形容詞が入ってこない。接続詞の移入は皆無にひとしい。そこで名詞以外の品詞が品切れになったわけである。とりわけ形容詞はものの性質や状態が静止し、変化しないあり方を表わすのだから、それはどうしても使用者の感覚に依らざるを得ない。またしても誤解をおそれずにいえば外国から日本人を移入しなければ（むろんこんなことは不可能であるけれども）、形容詞なぞふえっこないだろう。日本人の使った形容詞でないと日本人にはぴたりとこないのである。

このようなとき、わたしたちはどんな次善の策を講じるのだろうか。第一に英語やフランス語の形容詞を日本語に移しかえるのをやめ、そのまま片仮名で使う。たとえば昭和四十年に日清紡は新聞に次の如き広告を出した。

すてき　美しい　粋な　におやかな　fancy　すずしい　知性的な　しとやかな　wonder-

ful　エキゾチック　優雅な　きれい　fresh　ぜいたく　誇らかな　清楚な　花の精のような　純粋な　わかわかしい　fantastic　はなやかな　あこがれの　dressy　女らしい　神秘な　charming　さわやかな　あでやかな　気品のある　華麗な　high-sense　しゃれた　思い出の　かろやかな　romantic　魅惑的な　都会的な　fashionable　de-luxe　晴れやかな　洗練された　gorgeous　きゃしゃな　宝石のような　elegant　moody　jolly　上品な　幸せな　愛らしい——

ローヤルレース

エキゾチックというのが一個出てきたが、このように舶来品を片仮名で使う手はないでもない。下手をするとペダンチックで、なにやらスノビッシュで、どうにもイディオチックで、この文章みたいになってしまうから、この手の形容詞はなるべくならば願い下げにしたい。

第二の方法は、二字繋ぎの漢語に〈ナ〉をつけるやり方で、右の例文では〈優雅な〉や〈清楚な〉がそれに当る。だがこれはどうも安易な、安直な、手軽な感じがする、ちょうどこの文章のように。

第三の方法はやはり二字繋ぎの漢語に〈……的〉なる的をぶらさげて形容詞をつくるという、本邦の知識人から積極的、圧倒的、絶対的、驚倒的、信仰的、神懸的、盲目的支持を受けているやり方だが、連続的、集中的、持続的使用をするとまるでこの文章のように知性的を瞬間的に通り越し痴呆的作文になってしまうので、良心的物書きはこの手の形容詞に警戒的、消極的態度をとらざるを得ない。そこでもっと本来的な形容詞を、より感覚的で、喚起的能力のある、本格的（どうも癖が抜けぬ、こういうのを末期的と称する）形容詞がないものかと考え、それ

にはやはり文法的知識を精力的に導入しなければと四十の手習、文法書をぼちぼち集めだしたところなのだ。おかげで名詞に、〈……ぽい〉や〈……くさい〉や〈……らしい〉を連らなせればどうやら日本語っぽい、やまとことばくさい、母国語らしい形容詞をつくることができそうな気配になってきたけれども。

ところで柳田國男の『國語の將來』によると、明治以前においても形容詞はすくなかったらしく、その理由を次の如くいう。

> 是まで久しい間、(日本人の大多数は)さう形容詞の入用でない社會で生活して居たのである。同じ一つの事物に共同に接する場合で無くとも、一家一鄕黨の感情の動きには殆ど意外なものが無く、從つて又互ひに心持がよくわかつて居たとすると、常の交通には形容詞を附加すべき必要がない。「そんな」や「あの樣な」を無闇に使用して、前置きも說明もせずに濟ますといふことは、或は外國では許されない文法かも知れぬが、我々は平氣で今でもそれを遣つて居る。

右の考えを飴玉よろしくしゃぶっているうちに、わたしは形容詞がすくなかったのは「互ひに心持がよくわかつて居た」からではなくて、たがいに腹の底が知れないからこそではなかったか、という疑いに突き当ったのだが、そういう疑問を抱いてはまちがいだろうか。これもまた暴論の謗りをまぬがれないが、たとえば枕詞はその一例証ではないのか。塩舟はいつも帆を並べてくるとはかぎらないのに〈しほぶねの〉は常に〈並べ〉を修飾し、形容する。滝の瀬にも淀んだところがあるにちがいないのに〈たきつせの〉は必ず〈早し〉にかかる。飛び行く鳥

は毎度仲間におくれまいとして争っているわけでもないのに〈ゆくとりの〉とくれば〈争ふ〉と繋がる。ある事物を修飾し形容する言い方が常に同一でなくてはならない、このような約束ごとが重んじられ、しかもその数が八百五十にも及ぶというのは、人びとの心持がぴたりと合っていたからではなくて、互いに相手の腹の底がわからず、それでは不安でたまらないので、そういう約束を決め、このときはこう、あのときはああとおもいこむようにしたのではないのか。そしてこういう下地ができあがれば、もう形容詞はさほど多くなくてもことは済む——。事情は今でも同じで、大事件が出来すれば、まずあちこちでおずおずとものを言い、互いの胸のうちが読めたところで、わーっと同じことを叫び立てるわたしたちに、このやり方はそっくり受け継がれているもののようである。その場合、枕詞は〈あかねさす——朝日〉だったり、〈しじくしろ——黄泉うり〉だったり、〈ころもでの——まいにち〉だったり、〈たかひかる——ブラウン管〉だったり、いろいろであるが。さあれ事情がそうならば、文法書で一夜漬してなにかよろしき形容詞をときょろきょろしてもはじまらないかもしれない。

擬声語

さいとう・たかをの劇画『ゴルゴ13』（サーティーン）には、国語学者山田孝雄（よしお）（一八七三―一九五八）の言う〈状態を委しくする副詞・そのうちの口項〉に該当するコトバが氾濫している。などと始めるといかにも厳（いかめ）しいが、種明しをすれば擬声語（擬態語も含む）のことで、さいとう・たかをはこれの案出の名人上手である。ゴルゴ13は本名を東研作という国際的な殺し屋で、神出鬼没に三ツ揃のスーツを着せたような男であるが、彼が生きて行動するのは、ジェット旅客機がグオオーッと飛び、自動車がブィーッと疾駆し、それが曲り角ではキキキィーッときしみ、ドアがチャと開き、ひかり号がピィ――――ッと走る擬声音の世界だ。その世界でこの男は、銃をタッと構え、ドキューン、あるいはズキューンッと必殺の銃弾を放ち、その銃弾はビルの窓ガラスをビシッと射抜き、犠牲者の額にバッとめり込む。犠牲者はカッと目を見開いたまま、ズズ……と崩れ落ち、……ドォ……と仆れる。ゴルゴ13はそれを見届け、煙草をくわえてシュバ！　とデュポンのライターで火を点ける。そうしてフウ――――ッと深ぶかと一服。ところが油断大敵、背後から相手方の殺し屋がタッタッタッと走り寄り、彼の後頭部めがけ、ソフトボールほどもある拳骨をシュッシュッシュッとくり出す。ゴルゴ13はそれを間一髪のところでヒョッと躱（かわ）すが、相手はさらにザウッ、ビュッ、ザッと鉄拳による攻撃をやめない。ゴルゴ13は

次第に追いつめられて行くが、土壇場でシェッと乾坤一擲の反攻、彼の拳骨は相手の顴骨にグワシッとぶち当り、ビィーッと血反吐をはいて敵の殺し屋はひっくりかえる……。

この劇画が発表されて間もないころ、わたしたちのあいだで、百円の使い捨てライターの発火石をカシャカシャとこすりながら、口で価数万円也の最高級ライターの着火音シュバ！ を模写するのが流行ったが、間もなく四十に手が届こうといういい大人どもがどうしてそのような子ども染みたことに熱中していたのかといえば、他の擬声語はともかくも、このシュバ！ という語音には、それによって表現される自然音――すなわち、銀座和光の貴金属品売場に黄金色の光を放ちつつ燦然と君臨する巴里直輸入の金張り手彫りの最高級ライターが立てるにちがいない豪奢な着火音――との間にある種の、たしかな必然の関係、べつに言えば音象徴が存在していたからだろう、と思われる。

音そのものとその音を人声にかえてできた擬声語、このふたつの関係が必然であれば、その擬声語は、わたしたちのコトバを豊かにする力をもつが、文学者たちにはこの擬声語はずいぶん評判がよくないようで、たとえば三島由紀夫は親の仇にでも出逢ったように擬声語を叩く。

> 擬音詞の第一の特徴は抽象性がないといふことであります。それは事物を事物のままに人の耳に傳達するだけの作用しかなく、言語が本來の機能をもたない、墮落した形であります。それが抽象的言語の間に混ると、言語の抽象性を汚し、濫用されるに及んでは作品の世界の獨立性を汚します。
>
> （『文章讀本』第七章）

副詞というのは、動詞や形容詞による表現にさらになにものかを加えるコトバである。文章

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo